

庭野平和財団 NPFプログラム「緊急助成」(新型コロナウイルス感染拡大対応) 事業報告書

(1) 実施団体の概要

- ① 名 称 認定NPO法人ESAアジア教育支援の会
- ② 代表者 理事長 内田 智子
- ③ 住 所 東京都狛江市東和泉1-23-3-101
- ④ 電話番号/メールアドレス 03-5497-2261/ info@esajapan.org
- ⑤ 助成事業の担当責任者 辻 丹美

(2) 事業の概要

- ① 名 称 COVID-19緊急食糧支援
- ② 対象地 バングラデシュ シレット、チッタゴン
- ③ 目 的 新型コロナウイルス感染拡大により、バングラデシュでは3月中旬に学校が閉鎖、4月には全土ロックダウンが宣言された。その結果、日雇い労働者やリキシャ運転手等が収入を得られなくなった。農民も、農作物を売りに行くことができなくなった結果、収入が激減した。もともとその日の生活を送るのに精一杯だった人々にとって、ロックダウンは大きな打撃となり、食糧を買うことができず、感染の恐怖よりも飢餓の恐怖の方が大きくなっていった。政府による食糧支援は実施されたものの、過疎地域や少数民族の村にその支援は届かず、村人達はギリギリの生活を送っている。学校があれば、子どもたちは学校で栄養のある給食を摂ることができるが、休校中はそのような栄養補給も不可能である。これらの状況を踏まえ、各学校で緊急食糧支援が必要となった。秋以降、徐々に学校が再開されることを視野に入れた支援の必要性も出てきた。第2ステップとしてスムーズな学校運営が再スタートできるように、子どもたちの健康が維持できるように、学校給食支援や学校施設の消毒などを実施する。
- ④ 内 容
 - 1) バングラデシュの2地域4つの学校を拠点に、その学校に通学する生徒とその家族及び近隣住民に対して緊急食糧支援等を実施。
 - 2) 学校再開後は、栄養価の高い給食を提供。
 - 3) 感染リスクを抑えるために、学校施設の消毒の実施や石鹸・マスクの配布。

(3) 事業の振り返り

① 事業の結果

<食糧配布>

7月から各学校で2回ずつ食糧配布を実施した。生活に困窮している世帯にとって、恵みの支援であったとのこと。数ヶ月、家族が食べ物に困らず乗り越えられたようだ。9月から再開予定だった学校の休校が長引いたため、給食支援を食糧支援に切り替えて実施した。各学校での配布内容は以下の通り。

<衛生用品の設置>

チッタゴン・ジョナキ小学校では、7月以降教師が学校で子どもたちの家庭学習用の資料作成のため登校したり、食糧配布を行ったりしたため、定期的に学校施設の消毒を行った。

シレットの3つの小学校では、子どもたちに石鹸やマスクを配布し、家庭での手洗いの方法を指導するなど、感染リスクを軽減するためのヘルスケアクラスを実施した。

<学校給食の提供>

バングラデシュ国内の感染者数は一時減少に転じたものの、感染拡大が十分収まらなかつ

たため、政府は11月10日に小学校の年内休校を決定。結果的に、子どもたちに学校給食を提供し、健康増進を図ることはできなかった。上述の通り、学校給食に代わり食糧支援を実施した。なお、雇用確保のため、給食スタッフ（コック）を含む全教職員には、毎月の給与を支払った。

② 事業結果についての評価

村人達の収入減少が続く中、食糧支援を適切に実施できたことは大変良かった。また、子どもたちに手洗いの指導などを実施し、衛生に関する知識やコロナウィルス感染を抑えるために必要な知識を子どもたちに指導できた事も、大きな成果だった。

③ 受益者の感想・フィードバック

シレットのゴワバリ村の平均的な家庭では、お父さんが日雇い労働の仕事で週4日間働いて1日200タカ（週800タカ、約1,000円）を得て家族を養っていた。ところがコロナウィルスの影響で日雇いの仕事が激減し、今は週1日100タカ（125円）しか得ることができないそうだ。その給料では家族の食べる米すら買えず、人々は苦しく辛い生活だった。政府の援助も少数民族の、またインド国境近い小さな村まで届く事はなかった。ESAからの支援のみが彼らを支える手段であったため、村人から「私達のために、遠い日本からこうして食糧を届けてくれてありがとうございます。」と心からの感謝が伝えられた。

報告年月日：2020年12月25日

報告者氏名：辻 丹美

団体代表者氏名、代表者印：理事長 内田 智子 (印)

